
リ・ライフ～天獄と14人の自殺者達～

キセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リ・ライフ〜天獄と14人の自殺者達〜

【Nコード】

N1653Y

【作者名】

キセル

【あらすじ】

自殺した者は天国にも地獄にも行けない。

その行き着く先となる天獄という檻に捕われた性別も年齢も様々な14人の自殺者達。

各自殺者達に己の自殺に仕様した道具が配分された中、彼等14人は強制的な共同生活を強いられる。

共同生活はルールに反しない限り、何をしても自由であり、最後の一人となった者は望みを叶えた上でこの天獄から解放される。

”生き返り”を賭けたり・ライフゲームが今始まる。

〈共同生活のルール〉（前書き）

《小説閲覧前の注意点》

- ・この小説には残酷な表現や性的にキツイ表現があります。
- ・御都合展開はなるべく無いようにしますが出てくるかも知れませんが。
- ・作者が未熟なのでルールや設定に矛盾や穴が出てくる可能性もあります。
- ・作者が未熟なので誤字、脱字が目立つかもしれませんが適度に脳内補完して下さい。
- ・注意点がまた増えるかもしれません。

以上の事がオツケーという方のみ、読み進めて下さい。

〈共同生活のルール〉

うけけっ！はい、全知全能たる神様から貰った命をわざわざ自分で捨てたクズの皆々様注目うツ！！

ようこそ…てんごくへ！！

最初に言っておくけど天国じゃないよ天獄さ。

君達は知ってるかい、自殺した人間ってのは天国にも地獄にも行けないんだよ。

だからここは天国でも地獄でも無い、天獄。

だから僕は天の使いである天使でも地獄の鬼でも無い、天鬼です。うけけっ！なのでここには天国のような心地好い暮らしも地獄のような苦行も一切存在致しません、良かったね、自殺なんて一番の大罪とも言われてるのに。

まあ言葉を変えればこの空間には何も無いつて事だけだね。

君達14人にはそんなこの空間での共同生活を楽しんで貰おうと思いません。

君達は既に死んじゃってるので食事は必要ありません、共同生活の時間は無制限です。

一応共同生活でのルールがあるので良く覚えて下さい。

寺・天獄は自殺した者がその記憶を持ったまま辿り着きます、したがって天獄にいる者は全員自殺した事のある者です。

式・その際、自殺に使用した道具と身につけていた物が配布されま
す、道具の使用法に関しては各自自由です。

参・この空間に昼や夜、つまり時間の概念はありません、だから共同生活は時間無制限です。

氏・食事は必要ありません、飢えて倒れる事も、もちろん死ぬ事も
はありませんが睡眠は必要です、睡眠は各自、自分の部屋と独房以
外では禁止です。

呉・天鬼ちゃんはナビゲーター兼アイドルなので天鬼ちゃんへの攻
撃行為は禁止です。

録・時折天鬼ちゃんマジ天鬼からのプレゼントがあります、どう使
うかは自由です。

七・不純異性行為、つまり性行為は両者の合意、レイプのどちらも
禁じます、合意の場合はどちらも、レイプの場合は加害者が処罰の
対象です、性行為の基準は天鬼ちゃん基準です。

兆・独房の使用は自由ですが鍵は共通の物として必ず指定の場所に
戻して下さい、個人による管理は禁止します。

Q・この空間を調べる事は自由ですが決められた立入禁止の場所に
入るのは禁止です。

獣・共同生活の中で殺された場合、それは成仏扱いとなります。

銃市・全員成仏し、最後の一人となった者は願い事を一つ叶えた上
で生き返る事が出来ます。

12・共同生活をする上でルールは絶対でありマス。

十三・上記のルールにある禁止部分を犯した人には成仏して貰いま
す、ですが禁止部分に触れなければ何をしても自由です。

じゅっよん・》

《

うけけっ!!!!では、ルールをしっかりと守って楽しい共同生活を送りましょう!!!

〈共同生活のルール〉（後書き）

と、いう訳で始まりました、リ・ライフと天獄と14人の自殺者達、作者のキセルです。

ヴァイスさん、タイトル名の提供ありがとうございます！！

自分はシークレットゲームというゼロサムゲーム物の二次創作をメインで書いてましたが書いてるうちにオリジナルのゼロサムゲーム物を一本作ってみたくなったので本小説をスタートさせました。始まりから終わりまでの大まかな流れは決まっていますので最後まで付き合っただけ貰えたら嬉しいですよ。

また、シークレットゲームの小説の方も同時にちよくちよく更新して行きたいのでそちらの方もご贖戻して貰えたら嬉しいです。

プロローグへ終わり、始まる

たいした理由は無かった。

別段、人生に疲れたとか恋人が死んでその後を追う為とかそんな理由は無いです。

仕事も決して順調とは言えたものでは無いにしろ、職場の人間関係も悪くなかった。

もちろん結婚なんてものもしてないし両親の手からは既に離れているので俗に言う家庭の事情ってやつでも無い。

それでも…俺、遼 彼方は気が付けばナイフで手首をかつ斬っていた。

ああ、ちなみにこの苗字と名前はコンプレックスと言えたが親父が遼 大地、妹が遼 海恵というふざけた家系のもの（母親は遼 春香というある意味でもっとも残念）なので別段気にはしていない。

だから俺にはわからなかった。

自分が何故、自殺したのか、その明確な理由が。

何か…、何かあったはずだ。

答えを出そうと頭を使おうとするがどうにも働かない。

当然だ、今も俺の手首からはドクドクと血が流れている。

動脈…イツたかな？

痛みに叫ぶ事になるだろうと思って事前にテレビをつけておいたがそこまで必要では無かった。

今もニュース番組で連続猟奇殺人犯が自殺したニュースをやっているがその中身は俺の耳には通っていない。

痛みはそれ程でも無かったがどうしようも無い虚無感に襲われていた、

出血多量により血が足りないのだろう。

視界がぼやけていく…。

ああ、もう良いや、考えるのは。

流れに身を任せようと目を閉じる。

切った瞬間は激しく鼓動していた心臓も穏やかで静かなものになっていた

トクンッ…トクンッ

トク…ンッ。

ドクン…ドクンッ

どれだけ時間がたっただろうか？

心臓の鼓動が止まらない事に俺は違和感を覚えた。

それどころかさきほどまでぼんやりとしていた頭が今は覚醒している。

こうやって思考する事が出来るのが何よりの証拠だ。

これは明らかな異常だ。

目を開けるのが怖かったが今のこの状況を知る為にはまず、それが
必要だ。

ゆっくりと目を開ける、まぶたはすんなりと上へと上がり。

「ッ…！」

俺は驚愕した。

そこが”今まで自分が見た事の無い場所”だったからだ。

見慣れたポロアパートの自室から一変、目に映るのは身に覚えの無い部屋。

「どこだ…ここは？」

当然の疑問だがそれに対する答えが出るはずが無い。

目覚めた俺の身体はベッドの上に寝かされている形だった。

決して高級品とは言えない代物ではあるが自室であるポロアパートの煎餅布団よりは寝心地が良い。

俺はとりあえず起き上がるとベッドに腰をかけて部屋を見渡す。

とくに注目すべき家具も置かれていない殺風景な洋風の部屋。

どこかの殺人事件が起こりそうな洋館の一部屋という印象だった。

あるのはベッドと机、それと最早映る事の無いアナログテレビ。

ドアはあるので出られる事は出られるだろうが…、とりあえずは状況の整理が先決だ。

「病院…な訳無いよな」

俺の自殺…厳密には俺は今生きてるから自殺未遂になるが、に気付

いた誰かが救急車を呼んで俺を病院まで運んだ。

そんな事はこの現状を見れば推理するまでも無く、間違いだとわかる。

「……………」

俺の右手。

そのリストカットした部分を意図的に見ないようにしながら手を握ったり開いたりしてみる。

ぐっ、ぱっと何事も無く正常に動く、…いや、動いてしまった。

恐る恐るその箇所を薄目で、目を配らせてみる。

「嘘…だろ？」

傷が消えていた。

あれ程流れていた多量の血も消え去り、普通の、代わり映えの無い自分の腕が見える。

「…なんだってんだ」

状況が掴めずに落胆する。

ふとポケットに何か入っている事に気付き、すぐにそれが何かかわかった。

「…タバコか」

箱に入ったタバコと100円ライター、タバコは七本入っていた。

そついや…持ったままだったか。

そのうちの一本を抜き取り、口にくわえるとライターで火をつけ、一服をする。

タバコの本数を考えると少し勿体ないかと思ったが何より一度、気持ちを落ち着かせたかった。

「ふうっ…」

肺に入れた煙を吹き出す。

暇つぶしにアナログテレビをつけようかと思ったがリモコンも本体の電源スイッチも見当たらない。

落ち着いて今の状況を整理してみよう。

俺は自殺の為に右手首をナイフでかつ切った。

それは間違いないが…、その傷はすでに存在せず、俺の身体はどこかもわからぬ場所に移されていた。

ここが病院で無い事は明らかだが、拉致されて来た…と説明する決定的なものも無い。

自殺者を一つの島に送る。

以前、そんな漫画を見たことがあったのでその可能性が脳裏を過ぎる。

「アホくさい、と頭を振って、フィクションと現実を混同しないようにした。」

「現実…か」

言葉に出して改めて考える。

ここはもしかしたら…死後、天国とか地獄とか、そんなレベルの場所なのではないか？

当たり前だが死んだ後の世界を見た者等居ない。

小説や漫画によく書かれている死後の世界だってしよせん、イメージや空想で作られたものだ。

「ただ…」

ここが死後の世界ならば…間違い無く地獄だ。

俺が天国に行けるはずが無い。

「やっぱ…部屋から出るしかないか」

タバコを床でもみ消し、重い腰を上げてようやく立ち上がる。

…そういえば、机はまだ調べてなかったな。

「…なっ!!」

視線を机に向け、俺の身体はまた硬直した。

机の上に置かれたそれを手に取り、まじまじと見つめる。

「何で…こんな物が」

ギリリとした刃に俺の顔が写る。

思い出すのは先程の自分の姿。

ナイフで自分の右手首を切るその姿。

そして…今俺が握りしめているそれはナイフ。

俺が自殺に使った物よりも刃渡りが長く、鋭い。

形こそ違つが、ナイフで自殺し、気付いた場所に置かれていた物もナイフ。

ゾクゾクと妙な寒気がした。

ブウンッ

「!?!」

その時、ずっと沈黙していた背後のアナログテレビのスイッチが入った。

「…おいおい」

テレビ画面に映ったのは…”見た事の無い生物”だった。

天使のような翼に悪魔のような身体。

悪魔のような角に天使のような輪っか。

「…はあ？」

天使とも悪魔とも見えるその生物を見た瞬間、俺は冷めた。

謎生物のどこぞのバラエティ番組の企画のマスコットキャラのようなその出で立ちにだ。

『うけけけっ！』

画面の中の謎生物は男とも女とも取れないような甲高い声を上げる。

『ようこそ、命を捨てた皆様、皆様は一度、自分でその命を捨てました、つまりこれって命がいらないうって事ですよねえ』

画面の中の謎生物は一方的にこちらに向けて言葉をかけてくる。

謎生物の言う、自分で命を捨てた、という言葉は間違いなく自殺した事を示している。

『うけけけっ！！なので今君達に与えられた命をどう使おうが僕の勝手です』

「こいつ…何勝手に」命を…使う？

こいつは何を言っている？

『これより説明会を開催します、皆様は大広間へとお集まり下さい』

「…説明があるのか？」

今のこの状況に対しての説明ならば俺としても断る理由はない。

…が、ノリがいよいよどこぞのバラエティー番組じみている。

『説明会の前にルールを一つ与えます、良いですかあ？聞き漏らさないで下さいよ、一度しか言わないですよお？』

画面の中の謎生物が勿体振るようにクルクルと回りだす。

状況が掴めない俺はただイライラとした。

『十三・上記のルールにある禁止部分を犯した人には成仏して貰います、ですが禁止部分に触れなければ何をしても自由です』

「…は？」

『うけけけけっ！それでは！説明会でまた会おうね！』

「なっ！ちよっと待てよ！！」

ブツンッ…

俺の言葉に耳を貸すつもりも無いのか、アナログテレビは役目を果たしたように電源を切り落とし、再び動かなくなった。

「上記のルールって…肝心のルールが全然わかんねえんだけど」

一方的に話し掛けられ、会話を終えられたので置いてけぼりにされた感がある。

それに出て来た単語がいくつか引っ掛かる。

ルール、禁止部分、成仏。

そして何をしても良いという言葉。

「…十三？」

謎生物は確かにそう言っていた。

つまりこれは13番目のルールと言う事を考えられる。

そしてこちらに向けて呼び掛ける時に発した”皆様”という呼び方。ルールを一人に一つずつ与え、俺は13番目、と考えればしっくりと来る。

「他にも…誰か居るのか？」

自分以外にも誰かが居るといふ安心感に多少心が落ち着く。

だがそれは同時に得体の知れない誰かが居るといふ恐怖も生まれる。

「…くそ」

気持ちを落ち着かせようと再びタバコを抜き取り、口に加え。

「……………」

…止めた。

この先、どれだけ長い間ここに居るかわからない。

別段、ヘビースモーカーという訳では無いがちょっとは温存しておいた方が良さだろう。

「…行くか」

ナイフは一応、持っていた方が良さだろうと思い、服に隠しておく。

ドアに手をかけて、そういえばと手を止めた。

「鍵…無いんだな」

特に置いておく物も無いので今はそれで良いが…。

考えないようにしても”これから”について考えてしまっ。

言いよつた無い不安が俺を包み込んでいた。

プロローグへ幼なじみ

ボタンツ

部屋を出るとそこには薄暗い通路が広がっていた。

改めて自分の居た部屋のドアを見るとご丁寧にも『N O ・ 1 3 』《遼
彼方》』とネームプレートがかけられている。

「…マジか」

まるで招待されたかのような状況に疑問は部屋に居た時よりも更に
広がる。

パツと見て自分以外の人間が居るようには見えないが…それは単に
通路が薄暗く、奥の方が見えないからだろう。

キュルキュルキュル…。

「…何だ？」

だが…変わりに聞こえてくる車輪を回す音。

バイクや車の類では無い事はゆっくりとした車輪が回る音でわかる。

…だとしたらこの音の正体は何だ？

音の正体を確かめる為に、ゆっくりとその先へ向かう。

慎重に…、服に隠したナイフをいつでも取り出せるようにしながら
暗がりの中を進み。

そしてその正体を見た。

「　　ッ！！」

俺はその”正体”を見た瞬間数秒間固まり。

…ここが《天国》だと確信した。

車椅子に座り込んだその”正体”は。

「詩織…、柏瀬かしわせ 詩織しおり？」

「…ひゃうっ？」

相手は声をかけられた事が…、いや、名前を呼ばれた事がよっぽど
意外だったのだらう間抜けな声を上げた。

「詩織！やっぱり詩織なのか！！」

俺は詩織に近付くとその存在を確かめるように身体を掴む。

柏瀬 詩織は…俺の幼なじみだ。

本来ならば…二度と会はずの無い幼なじみ、なぜなら。

「昔のまんまだ…何で？どうなってる！？」

彼女は…本来なら三年前に”既に他界している”。

その彼女が…”他界した時のままの身体”でそこにいるのだ

なので今、目の前にいる詩織の存在が信じられず、その身体にベタベタと触る。

キュルルルッ

「おわつとー!!」

だがそれは詩織が突然車椅子を後ろに引いて後退させた事でストッブさせられた。

「かなちや、…彼方？」

遠い昔の呼び方をしようとした詩織は言葉を一度詰まらせ、俺を名前で呼ぶ。

「…わかるのか？」

「何となく…面影は残ってたから、何でここに？」

「それはこっちの台詞…いや」

詩織がここに居る事で一つ、確信出来た事。

ここが死後の世界だというのは確実だった。

その事を詩織にも伝えようとした時。

ガチャッ

詩織の背後で扉が開いた。

「…誰？」

現れたのは…今度は知らない女だった。

見た目的な年齢は詩織と対して変わらないであろう、女子高生くらいの少女。

「あっ…未娘さん」

詩織は面識があるらしく、その女性の名前を呼ぶ。

「…あんたは？」

知らない人物の登場に俺は少なからず、警戒をした。

「人に名前を尋ねる時はまず自分からじゃない？ 遼 彼方さん」

「なんで俺の名前を…、詩織から聞いたのか？」

視線を詩織に見せるが彼女は黙って首を横に振った。

「変に警戒心を持たれるのは心外ね、私はただネームプレートを見ただけよ」

女は腕を組んで冷静な口調でそう答えてくれる。

「なるほどな…、んで、改めて聞くがお前は？」

扉に掲げられたネームプレートにはそれぞれ、確かに名前がついている。

なので”とりあえず”は女の言う事を信じる事にした。

「織笠 おりかさ 未娘 みこ…」

少女は静かな口調で自分の名前を告げる。

「それで…二人は知り合いみたいだけど、ここがどこだか知ってる？」

織笠の言葉を聞くと彼女も境遇は俺達と変わらないのだろう。

「さあ…？俺も今、気付いたらこの場所に居た」

「そう…、二人は兄妹…という訳には似てないし」

「だ…誰がこんな奴ときょうだ」

「単なる幼なじみだよ」

織笠は俺と詩織の関係が気になるのか、口を挟もうとする詩織より先に俺はそう告げる。

「幼なじみ…？随分と歳が違っけど」

そりゃそうだ、詩織は女子高生、対する俺は二十歳になる。

いや…詩織が生きていれば俺と同じ歳なんだろうが。

「ちょっと待てよ、そっちはっか質問してるが俺からの質問も答えて貰っぞ」

俺はこの状況を整理する為の最大の問いをこの女にしてみる事にした。

「…づいづい」

「…ここに来る前、最後の記憶を覚えているか？」

…俺と詩織には共通点がある。

それは幼なじみという単なる括りでは無く、もっと具体的な物で、だ。

「……………」

「もしかして…けどな、お前は…」

だんまりを決め込む織笠に俺はその答えを先に言おうとした。

「…自殺したら、気付いたらここに居た」

「…ッ」

…やはり、同じだ。

俺は当然として…だが、詩織の死も自殺だったのだから。

「…それじゃあ、あなた達も？」

「ああ、俺も詩織もじさ」

トゴッ

「ぶべっ!!」

言いかけた俺の身体めがけて詩織が車椅子事猛スピードで突っ込んで来た。

「痛…、何しやがる!!」

こんな状況でもしつかりと機能している痛覚に恨みながら俺は詩織を睨み付けた。

「……………」

だが俺の怒りは一瞬で片隅の方へと追いやられる。

「…死ね」

詩織は目に涙を溜め、呪いを込めた目で俺を睨みつけていた。

…そつだ。

目の前の車椅子の少女が俺を憎んでいないはずがない。

なんせ今目の前に居る男は幼なじみ…兼。

自殺の原因を作った張本人なのだから。

「…すまん」

謝ってどうにかなるものでも無く、それでも出来る事と言えば頭を下げ、そう呟く事くらいだった。

「…何について？」

「何につて…そりゃ」

…決まっているだろ。

俺は言葉を続けようとするが…。

「…いい加減に本題に戻って良い？」

痺れを切らしたのか、織笠がその場の空気を最初のものに戻した。

「…あ、ああ」

心の中で感謝しつつ、俺は”本題”について考える。

ここでの本題というのは当然、俺達三人の共通点だ。

「さつき言いかけてたけど、あなた達二人も自殺した…という事で間違い無いのね？」

「ああ…間違い無い」

背後で睨む詩織の気配に冷や汗をかきつつ、俺は答える。

「一緒の所を見ると…二人は心中でもしたの？」

「だ…誰がこいつとなんか」

「詩織は三年前だ、葬式には俺も行って」

「ふくん…そんな時”だけ”は来たんだ」

棘のある言い方だが俺に反論の権利は無い。

「それが本当なら…私達の共通点は死…、それも自殺って事か」

「…ここが死後の世界だとしても、三年前に死んだ詩織と今の俺がこうして存在しているのがわからんな」

「…もしかしたらここには本当に時間の概念が無いのかもね」

「時間の概念が無い？時間が流れて無いつて事か？」

「…携帯は見た？」

言われてハッと気付く。

あまりにも突然にこの状況におかれたせいか、真っ先に確認すべき事を忘れていた。

「…まず状況を知るのがこういう場合の鉄則だと思うけど」

呆れたような織笠の声だが反論も出来ないので、曖昧な返答と共に携帯を見た。

アンテナのマーク当然立っておらず、圏外だったがそれよりも気になったのは日付と時間だった。

《16/38【冥】》

《0:123》

「…は？」

有り得ない日付と曜日、そして時間。

これが本当なら今日は16月38日の冥曜日、0時123分という無茶苦茶な時間だ。

「私の携帯も時計も似たような感じ、この意味がわかる？」

「ええ…」

織笠の問いに詩織は神妙にコクリと頷いた。

「このままじゃお正月が来ないですね」

「……………」

大まじめな詩織の問いに織笠は俺達に会ってから初めて目を丸くしていた。

冷静な雰囲気、織笠から初めて一本を取った気分だ、…詩織がただ。

「彼方…ちよつと」

チヨイチヨイと手招きされたので仕方なく織笠に寄る。

どうでもいいが呼び捨てかよ。

「彼女つて…」

「ああ…えつと、ちよつと残念な奴だな」

一見クールに見えて実は天然なのが詩織だった。

全く関係無いが小学生の遠足の説明会の時、あんまんはおやつに入りますか？とビツと綺麗に手を上げて質問した詩織の姿を思い出す。

「詩織さん…つまりね、三年前に死んだあなたとその三年を生きた彼方が一瞬に居る、どちらも死んでからここに来たとしたらここには時間、そのものが存在しない、意味の無いものという訳」

少し戸惑いながらも織笠は詩織に状況を説明した。

「なるほど…」

「わかった…？」

詩織がウンウンと頷くと織笠も安心したようにホッと息をつく。

「つまりここでは誕生日が来ないから歳を取らない…って事ね」

「……………」

難しい顔をして片手で顔をおおう織笠。

「詩織」

なのでここは助け船を出してやろうと考えた。

「つまりだ、あんまんを買ってから三年後にもう一度あんまんを買ったけど二つの中身はあんまんだったという事だ」

「…なるほど」

「…それで言いの？」

半ば呆れた声の織笠に良いんだよと伝えるように俺は頷く。

「これで三人…か」

それで納得したのか織笠は長く続く廊下の先を見た。

「私達に振り分けられたナンバーだけどね、詩織さんの14番で最後だった」

「つまり俺達は全部で14人…かな、普通に考えれば」

部屋のネームプレートにはNo.13と印されていたし、俺はかなり後ろの方だったようだ。

「ちなみに織笠は？」

「私？私は9番だったけど？」

「9番…？」

部屋の順は番号の順だ。

なので9番目の織笠が14番目の詩織に最初に出会った事が気になった。

「私の他にも何人が居る事はわかってたから、最初に全部で何人居るのか確認しただけよ」

「…なるほど」

しかし織笠のこの冷静さ、そして行動の速さ。

どこか不自然なものを感じながらも今その答えが出て来るはずはない。

「とりあえず…なんだが、説明会…ってのに行かないとな」

そこで今の俺達のおかれたこの状況の答えが出れば良いが…。

「賛成…、あつ、だけど他の人は？」

「これだけ通路で話してて誰も出て来ないし、みんなもう大広間に集まったかもね」

詩織の疑問に織笠が答え、詩織もそれに納得したのかなるほどと頷いた。

「それに大広間に行けばどのみち全員が来るだろう、んじゃ…行くか」

俺はそう言っつて詩織の車椅子を運転しようかと思ひ、取っ手に手を置いた。

キュルルルッ

「おわっ！！」

だがそれを拒むように詩織は車輪を回して俺から距離を取るようになり前へと進み。

バシンッ

「あうっ…」

壁にぶつかった。

「い、良い、一人で行けるから」

顔を赤くさせながらも、それでも詩織は気丈にそう答える。

「…そうかよ」

俺はやれやれといった具合に詩織の後へと続いた。

「……………」

背後では織笠が詩織の車椅子をじっと見つめていた。

プロローグへ大広間

薄暗く続く廊下を俺と織笠が歩き、詩織が車椅子の車輪を転がしていく。

大広間と書かれた部屋を見つけるのにそう時間はかからなかった。

中に入ると廊下の薄暗さとは一転して大広間は明るく、暗さに慣れた目を刺激される。

大広間と呼べるほどの大きさでは無いにしろ、丸い机とそれをぐるりと囲む椅子。

既に8人の男女が椅子に座っており、部屋に入って来た俺達を一斉に見た。

織笠は冷静に詩織は状況に戸惑い、俺は軽く手を振っての入場。

何人かは手を振り返してくれたが大半は無反応だった。

…これで11人か。

俺と詩織、そして織笠の境遇を考えればここに居る皆も立場は同じなのだろうか？

「…一つ、警告しとく」

「…ん？」

横に居た織笠がぼつりと俺達二人にだけ聞こえるように呟いた。

「ここから先…不用意な発言や行動は控えなさい」

織笠はそれだけ告げるとさっさと前に出て俺達と距離をとった。

「……………」

織笠の言いたい事は俺にもよくわかっていた。

この異常な建物に集められた14人。

これから何が始まるかはわからないが良い予感ではなかった。

「…そうね、自己紹介に失敗したら痛い娘になっちゃうし」

俺の隣に居る一見クールな天然幼なじみは多分、わかってないだろうが。

俺と詩織も空いている適当な椅子に向かう。

車椅子の詩織の為に椅子を退かし、スペースを作っちゃった。

「さて、これで11人目ね、あなた達、名前は？」

新たに大広間を訪れた俺達三人に向け、一人の女が立ち上がり、声をかけてきた。

歳は…大学生くらいだろうか？

「私？柏瀬 詩織」

「織笠 未娘…」

女性陣二人が先に自分の名前を告げる。

「私は宇佐 飯子よ、よろしく」

宇佐は二人に軽く手を差し出して握手を求め、二人がそれに答えると今度はぐるりと俺の方を見た。

「それで、あなたは？」

「……………」

友好的な宇佐には悪いが俺は名前が名前だけにあまりギャグ染みているのでイマイチ、こういう場で言うのに戸惑う。

「ちよつと！聞いているの？」

だがそんな俺の心中なんぞ察せずに宇佐は俺に顔を近付かせて来た。

「…聞いているよ、んな大声あげなくても」

「彼方、早く遼 彼方って名乗らないと皆彼方をどう呼べばいいかわからないんじゃない？」

「いや、もう名乗る必要無くなったわ」

親切心でそう言った幼なじみに感謝という名の舌打ちをして俺は答えた。

「遼…彼方？」

宇佐を見ると明らかに笑いをこらえるように頬を引き攣らせていた。

「人の名前とか笑うのは失礼だと思うが…」

「そ、そうね…、ごめんなさいね、遼 彼方さん」

「ちょっと、フルネームとか止めてくんないか」

「なんか語呂がいいから…、それじゃあ皆、改めてもう一度自己紹介でもしましょうか？」

宇佐が周りをぐるっと見渡しながらそう声に出した。

「おいおい宇佐さんよ、これで何度目の自己紹介だよ？いい加減だるくなるわ」

椅子に寄り掛かって両手を頭の後ろに置いていた男がうんざりとした声を出した。

金髪のガラの悪そうな男だ。

「大事な事よ、これをしないと誰が誰だかもわからないでしょ」

そんな男の態度が気に食わないのだろう、宇佐も目を鋭くさせていた。

「だから全員揃ってからやれつつあったんだよ、俺は」

男は面倒臭さそうにため息をつく。と男達の方に向けて片手を上げた。

「赤松 慶二だ、まつ…仲良くやっていこうや」

赤松は含みのある笑みを浮かべると軽く挨拶を済ます。

「んじゃ、次」

そしてそのまま自分の隣に居るガタイの良い男の肩にバトンタッチするように手を置いた。

「誹泉 紳一だ…」

誹泉は名前だけ淡々と告げると腕を組んで目を閉じた。

恐らくかなり鍛えてある身体も合わさって威圧感がある。

その誹泉の横、まるで誹泉を壁にして赤松と距離を取るようになっている男…いや女？中性的な顔立ちだしどっちだろうか？

「えっと…僕かな？深見 柁だよ、よろしく、あの…男です」

ぺこりと頭を下げる深見と名乗る男は俺の言いたい事がわかってるのかそう付け加えた。

中性的な美青年の顔立ちの女と言われても納得してしまいそうである。

「よろしく、彼方さん」

「ああ、よろしく……」

深見は友好的に俺に握手を求めて来たので俺もそれに応えた。

「……？」

不可解なのは深見が俺の手を離そうとせず俺の目をじっと見つめていた事だった。

「おい…手」

「あつ…うん、ごめん」

深見は慌てて俺から距離を取るように離れると両手を振った。

…顔を赤くさせているが、うん、気にしない事にしよう。

「あはは…、えっと…じゃあ次は」

深見はキョロキョロとメンバーを見渡すと。

「じゃあ私が…」

一人のサラリーマン風の男が立ち上がり、ぺこりと頭を下げた。

「榊 昌弘（ましかき しょうひろ）です、いやあ…皆様若い方が多くて少し気恥ずかしいですな」

榊さんが言う通り、40代半ばであるう彼の年齢は俺達の中で群を抜いている。

しかしこれで俺達の年齢は本当にバラバラだというのがわかった。

しかし…どうにも幸薄そうな顔をしているな。

「はは…名刺でもあれば良いんですが、先日リストラされちゃいまして」

いや、本当に幸薄いんだこの人…。

「次は僕なんだけど…その前にちょっと一言良い？」

次に自己紹介を始めたのはメガネをかけた太った男だった。

見た目で人を判断すべきでは無いが見た目で判断するなら典型的なおタクに見える。

「…なんだ？」

「その車椅子に乗ってるお嬢さん」

「え？…私？」

詩織が自分を指差すと見た目オタクはコクコクと頷いた。

「車椅子キャラ来たッ！これで勝つる！！」

見た目オタク…、いやもういいや、核心した、見た目と変わらず中身もオタクだこいつ。

「…えっと、この車椅子には兵器とか仕掛けて無いけど」

「詩織もこれ以上話しをややこしくしないでくれ…、んで、あんたは？」

「おおまえだ大前田 ともきよ友清だよ、よろしく、遼殿」

「あ、ああ…よろしく」

…あまり深く突っ込まないようにしよう。

これで大広間に居る男性陣の自己紹介は終わったが気になったのは男性陣が固まっている事だった。

いや…、別に合コンしてるって訳じゃないから別に良いんだが…、それにしてもあからさまに男性陣が一人の女性から距離を置いている。

「なあ、あんたはなんで一人だけ離れてるんだよ？」

俺はその離れている一人の女性に近付き。

「こ、来ないで下さい…！」

「…はい？」

思いくそ拒絶された。

「彼方、あなた一体その人に何をしたの!!」

「何もしてなかっただろうが!今まで見てて!!」

横から来る詩織の怒声を正論で返してやる。

「あっ…すみません、その…、いきなり大声なんて出したりして」

「いや…いいけどさ」

謝る女性に一步近付く。

ガタッ

女性は椅子事俺から離れる。

「……………」

一步近付く。

ガタッ

女性は椅子事俺から離れる。

「大丈夫…大丈夫…大丈夫」

女性はそう言いながらも顔を引き攣らせていた。

「彼女は…ちよつと男性恐怖症っていうのかな？それなの」

その様子を見ていた宇佐がそう説明してくれた。

「う、ごめんなさい…！」

「いや…まあ、いいけどさ」

多少は傷ついていたけど大きく謝る女性になんともない風に応えた。

…なるほど、男性陣が固まっていた訳がわかったわ。

「わかった、俺はこっから動かないから、そんな怯えなくてくれ」

女性から距離を取って話しかけると女性はコクコクと首を縦に振ってくれた。

「さつきも自己紹介したけど俺は遠 彼方、こっちは柏瀬 詩織、
もう一人は織笠 未娘だ、あんたの名は？」

さつきから興味なさそうに場を眺めている織笠の事も紹介しつつ、
俺は再び声をかけた。

「は、はい…、水茂です、水茂^{みなも} めぐみ」

「そっか、これからよろしくな、水茂さん」

「勘弁して下さい…！」

「……………」

「こうまで拒絶されるとは…、やばい、ちょっと泣きそう。」

「気にしないで良いと思うよ、僕らもあんな感じだったし」

大前田がフォローを入れてくれた。

「いやあ、男性恐怖症キャラのテンプレはやはり怯えられるですな」

いや…フォローじゃ無かったか。

あ…うん、でもそういうアニメとかでも最近そんなキャラが増えたよな。

「あとは殴ったり暴力振るったりして来るとかか？」

ついニヤリと笑って返してやり、言うてからしまったと口をあけた。

「…ほほう、遼殿もなかなか通と見た」

キラリとメガネを光らせて大前田がかっこつける。

「い、いや、違…」

オタク…と言える程知識豊富では無いが、まあかじった程度には知識があったり。

「なんだよ、大前田の同類かよ…」

「だから違っつて…」

赤松が呆れたように茶化して来るのを俺は面倒臭さそうに返す。

別にアニメや漫画といったオタク文化だけで無く、バイクや車、政治からギャンブルの話しだって出来る。

まがりなりにも社会に出て生活した身として、それは必要な事だった。

話題を身につければ会話から置いていかれる事は無い。

会話から置いていかねなければ…グループから外れる事も無い。

だからこそ話題性のあるアニメや漫画、音楽にドラマや映画も見て。

ゲームやってギャンブルもやって先輩や友達のススめでスノーボーやゴルフといったいろんなスポーツもやって。

楽しかったかと聞かれればどれも楽しかったが…結局は中途半端のまま、知識を仕入れ、皆の話しに適当に話しを合わせて…。

そんな生活だった。

「…それが嫌だったのかもな」

だから…自殺した、のか？

いや…そんな事、少なからず誰もがやっている事だと思う。

「…彼方がオタクになった」

「だから違っつて…その虫を見るような目は止める!!」

幼なじみからの視線がキツイ…。

いや、詩織からすれば久しぶり？に会った成長した幼なじみがオタクになってたつて事だし、そりゃキツイ目にもなるか。

「幼なじみ萌え…とか叫ぶ人になるなんて」

「叫ばん叫ばん」

「…叫ばないの？」

いや、そんな素で返されてもこっちが困るんだが…。

「っーかなんだ？叫んで欲しいのか？」

「そ、そんな訳無いでしょ！馬鹿ッ!!」

…何で怒るよ。

「ほほう…、では遼殿はあくまでもオタクでは無いと？」

大前田が口元に笑みを浮かべながら近付いてくる。

「では…彼女を見てもまだそんな事が言えますかな？」

そして自信満々といった具合にまだ自己紹介の終えていない最後の一人を紹介した。

椅子にチヨコンと座り込んだ少女…、俺達の中でも一際年齢が若い。というか若い少女。

この部屋に入って最初にその少女に目がいったのは別に俺がロリコンとかそんなんじゃないやなくて少女の異質のせいだった。

ここに居る者は俺を含め全員私服なのだが…。

その少女は…巫女服だった。

巫女服といっても見た印象で感じた事で普通の神社の巫女さんが着ている正規？の物とは違うっぽい。

「……………」

「彼方…、鼻の下伸びてる」

「あ…いや、違う、そんなんじゃないや無いつて」

必死に否定しつつ、巫女服少女に近付いてみる

「じ、こんにちは…」

少女は怯えながらもぺこりと頭を下げてくれた。

「じんちは、名前は？」

「えっと…そのー」

名前を聞くと少女は恥ずかしそうに苦笑いを浮かべる。

その反応を俺はどこかで見たような気がして、それはすぐに思い浮かんだ。

…俺が名前を言う時と似てる。

「さつきも言ったが俺は遠 彼方なんつーふざけた名前なんだ、お前は？」

「その…、ひむかい…ひなた、です」

「ひむかい…ひなた？」

なんだ…普通じゃないか、何がそんなに言いづらかったんだ？

「はい、日に向か^{ひむかい}と書いて日向、日に向か^{ひなた}と書いて日向、それで日向 日向です」

「…あっ、なるほどね」

日向 日向、うん、うちのおかんと良い勝負だわ。

「…しかし…こんな子供が居るなんてな」

そういえば…ここに居る全員のどれだけが今のこの状況を理解しているのか…。

俺の場合はたまたま詩織の事を知っていたのが大きかったが。

「いえ…その、日向ちゃん、一人で来た訳じゃなくて」

俺の言葉に宇佐が言いづらそうに話しかけて来た。

「私、お母さんと一緒にここに来たんです」

「母親…？どこに居るんだ？」

宇佐も水茂も大学生くらいだし織笠は高校生、どう考えても年齢が合わない。

「し、詩織…まさかお前」

「ふふ…ようやく気付いたようね」

詩織はわざとらしく笑みを作って見せると。

「あなたの子よ」

「な、なんだってー」

冗談のつもりで言ったのに俺も無理矢理参戦させられてしまった…。

「ちなみに私は母親じゃないから」

「おい、人を巻き込んで自分だけ逃げるな」

いや、俺が最初詩織をからかおうって思ったのが発端だけど。

「彼女の母親はね、部屋に閉じこもったまま出てこないんだ」

幸薄そうなサラリーマン（元）、榊さんが心配したようにそう言った。

「出て来ないって…何してんだよ？こんな子供を一人にして」

普通この訳わかんねー状況で子供を一人にする親が居るのだろうか？

「あ、あの、うちのお母さんがすいません…！」

俺のハテナマークに答えるように慌てて頭を下げる日向。

「じつはね、さっきあなた達に来る前にちょうど、その事について話してたの」

宇佐が深刻そうなため息をついて机に手を置いた。

「あなた達も説明会を受ける為にここに来たのよね？」

宇佐の問いに頷いてみせる。

「僕らもそうなんだけどね、なんか始まる気配が全然無いんだよ、誹泉さんなんてもう1時間くらいは待ってるんじゃないかな？」

「…別に、たまたま一番に来ただけというせいもあるがな」

深見が見ると誹泉は淡々とした口調でそう告げた。

「やっぱり全員揃わねーとダメってか、ったく…もたもたしてんじやねーっつーの」

赤松は面倒臭さそうに悪態をついて不満をあらわにした。

「だから…ね、私達で来ない人達を迎えに行こうって話しをしてたの」

「なるほどね…」

今大広間に居るのは全員で11人。

つまり後三人来ていないって事になるのか。

「日向の母親の他に後二人か…、さすがにちよつと遅いな」

俺と詩織と織笠の三人は通路で話していた分出遅れたが、それよりも遅いという事はまだ気がついてないって可能性もある。

「良いと思っぜ、このまま待っててもいつ来るかわからんし」

このまま待ってても埒があかないならまだ自分で動いた方がマシだ。

「あの…、なんで来てないのがあと三人だっつてわかるんですか？」

水茂が恐る恐るといった具合に手を挙げて発言する。

なるほど、そういうえばみんなはまだ知らないか。

「部屋のナンバーは14までしかなかったし、ここには14人居る
つて考えたけど」

俺がそう答えると皆は納得したのか、それ以上の質問は無かった。

「迎えに行くのは良いけど…、でも全員で一人一人を迎えに行くの
つて効率も悪いし、手分けして行かない？」

深見の提案に皆が頷き、俺の方も得に文句は無い。

さて…そうになると俺は。

【A・日向の母親を迎えに行く】

【B・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

【C・Bとは別の二人の中の一人を迎えに行くか】

【D・思ったけど動きたく無いしここに居よう】

プロローグへ異常

「それじゃ、私達を三チームに分けましょうか、日向ちゃんと赤松さんと榊さんと大前田さんで日向ちゃんのお母さんを迎えに行く、その間に私と誹泉さんと水茂さんのチーム、遼 彼方さんと織笠さんと柏瀬さんと深見さんのチームで行きましょう」

…あれ？

なんか宇佐が勝手にチーム分けして前話の選択肢が粉々に砕けちっちゃったぞ。

【A・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

【B・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

【C・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

【D・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

…一択じゃねーか。

「おいおい…勝手に話し進めてんじゃねーよ」

これには当然、得に赤松が第一に嫌気がさしたように声を上げた。

「あんたさあ…いつから俺らのリーダーになった訳？」

「別に…そんなつもりは無いけど、ただ単にこれが一番バランスが

良いでしょ？何があるかわからないんだから」

食いかかる赤松に宇佐は眉をひそめながらも返した。

確かにバランスという点で見れば宇佐のチーム分けは悪くない。

三人組になるのは体格の良い誹泉が率いている組。

大広間に入る前から事前に面識のある俺と詩織、そして織笠の三人に車椅子の詩織の為か深見の四人。

そしてまだ幼い日向が居る所もきちんと四人チームになっている。

どの組にもきちんと男が居るというのも大きい。

「チームのバランスなんてどうでも良いんだよ、なんであんたがしきってるかって聞いてんだよ」

だがこの仕切り分けが良すぎる宇佐のチーム分けは余計に人の反感を食うものだ。

得に赤松なんかは他人の言う事なんざ聞きたくないという態度だった。

「だからそんなつもり無いって言うてるでしょ？だったらあなたがチーム分けすれば良いじゃない!!」

「…てめえ」

宇佐は腕を組み高圧的に。

赤松は睨みをきかせて宇佐を見た。

…ダメだこりゃ、売り言葉に買い言葉も良い所だ。

「…あ、あの」

そんな二人の言い争いの中、意外な人物が恐る恐ると手を上げた。

「…どうしたの？水茂さん」

「私…、男の人と行動するのはちょっと…」

まるで学級委員長が普段発言しないクラスメイトにするように宇佐が聞くと素直に水茂はそう告げた。

「え？あ！ああ…ごめんなさい」

だがこの水茂の発言はさすがに計算違いだったのか、宇佐が言葉に詰まる。

「くつくつく…、なんだよ、それじゃこのチーム分けは成立しねえな」

「赤松…いい加減にしろ、話しが進まん」

「…へいへい」

再び赤松が茶化そうとした所を誹泉が言葉を挟み、赤松も素直に引

き下がった。

「思ったんだけどさ、入れ違いになったら困らね？ほら…僕らが出てった後に他の三人が来たりとかさ」

「ああ…うん、そうだね、有り得るかも」

大前田の言葉に榊さんが頷く。

確かに…その可能性もあるか、そうなったら更に面倒だ。

「だったら…留守番役も必要って事だよな」

俺は顎に手を当てて考えながら。

「だったら詩織、水茂とここに残ってるよ」

「え…、私？」

車椅子での移動が仕様の詩織に残って貰う事にした。

別にそこまで集団の移動の妨げになる事は無いが…まあ、誰か残らなきゃいけないし。

「水茂もそれなら良いだろ？男と一緒に移動も無いし」

「え？あ…はい」

水茂は申し訳なさそうにシュンとなりながらも頷いてくれた。

しかし男性恐怖症ね…、最近漫画とかでよく見るネタだったけどここまでとは。

正直面倒臭さいというのが本音だが本人の前で言うのは止めとこつ。殴って来ないだけマシかと。

「んじゃそれで決まりだ、詩織と水茂の二人を残して三人チームでいこつ」

「となると」

話し合いの結果…と言っても俺のグループは詩織が抜けてちょうど俺と織笠と深見の三人組になる。

なので日向の母親を迎えに行く四人の中から榊さんが宇佐の居るチームに移った。

【日向・赤松・大前田】

【宇佐・榊さん・誹泉】

【俺・織笠・深見】

そして【詩織・水茂】の留守番組だ。

「さて…それじゃさっさと行くか」

と、大広間を出ようとして立ち止まる。

「どこにだよ、そういえば日向の母親はともかく、他の二人の部屋は知らないぞ」

「ああ…そうか、困ったね」

深見も気付いたのかしまったという顔だ。

「それについては消去法ですぐわかんと思うけど…」

「ああ…そうか、ここに居る俺ら以外のナンバーの奴の部屋に行けばいいのか」

呆れたように織笠に言われたがそう言われれば確かにそうだ。

ええと…俺が13で詩織が14、織笠が9だったよな…。

とりあえずここに居る11人でお互いにナンバーを教え合っがその場面は面倒なので省略しておく。

とりあえずの各ナンバーは以下の通りだった。

No.1・宇佐 飯子

No.2・榊 昌弘。

No.3・今だ来ない日向の母親。

No.4・日向 日向。

No.5・大前田 友清。

No.6・居ない…、つまりまだ来てない。

No.7・水茂 めぐみ。

NO・8・深見 榎。

NO・9・織笠 未娘

NO・10・赤松 慶二。

NO・11・居ない、もう一人の方が…。

NO・12・誹泉 伸一。

NO・13・俺…と言ったら名前忘れられそうなんで遠 彼方。

NO・14・柏瀬 詩織。

という訳で3・6・11のナンバーがまだ来てないという訳だ。

「それじゃ、今後こそ行きましようか」

「気を付けてな」

一旦、大広間を出て三人一組に別れる。

俺と織笠と深見のチームはNO・11の人物を迎えに行く事になった。

なので一度来た道をまた戻る事になる。

「なんで来ないんだらうね？」

その道中、深見が疑問を投げかけてくる。

「そりゃ…普通に考えてまだ寝てんじゃないか？あのテレビ、お前も見たる？」

「あ、やっぱり皆の部屋でも流れたんだ」

「そうじゃなきゃ皆、大広間に集まらないって」

普通、こんな訳のわからない状況になったらあのテレビに映った謎生物の言う通りに大広間に行くだろうし。

「……どうかしらね」

「……あん？」

そんな俺の返答に織笠が口を挟んでくる。

「この状況がすでに普通じゃないって事に気付いてないの？」

「そりゃ……気付いてるけどさ、今話しに出てるのは状況じゃなくて人だ、人」

まるで俺の考えを読んでいるかのような鋭い問い掛けに俺は一瞬口ごもるがすぐに反論する。

確かに状況は普通じゃない、完全に異常だ。

だがその異常な状況の中で普通、人がどう行動するか、今回はそれについて言っている。

「……」

「……」

「ちょっと……、喧嘩は止めなって、あ！ほら！……ついたよ」

睨み合う俺と織笠の間に挟まれて、さすがに居心地が悪かったのだろつ。

No.11の部屋の前についた深見は嬉しそうだった。

「くにさき国崎 みずほ瑞穂…」

そこに記された名前も大広間の誰のものとも一致しない。

「間違いないな」

とりあえず…だが、コンコンと軽くノックを試してみる。

中からは何の反応も無かった。

「おーい！誰か居るのかぁ！！」

今度は呼びかけてみる…が反応は無い。

「ほらな、やっぱ寝てんだよ」

「もしくは入れ違いで居ないのかもね」

肩を竦める俺に深見が言葉を付け加える。

「…そう思うなら中を開けたらどう？」

だが織笠の態度は変わらず、刺々しいものだった。

「…たく…、素直に負けを認めろよ」

まあどのみち中を確認する必要はあったが。

「入るぞ〜」

返事は期待せずに、扉を開けた。

「…は？」

そして俺は固まってしまっ。

予想が外れ、部屋の主である国崎 瑞穂なる少女の座り込んでいる
後ろ姿が見えたからだ。

少女はテレビの前からピクリとも動かない。

「…お〜い」

呼びかけてみる…が、返事どころか少女の後ろ姿は全く動かない。

「…寝てるんじゃないかな」

「座ったままか？…いや、うん…そういう人も居るよな」

深見の言葉に頷き、俺は寝てる？少女を起こそうとして。

「…？」

再び…立ち止まった。

何か…言っている？

ぶつぶつとだが…囁くように微かに、後ろ姿の少女が声を発していた。

「…君、… ヨウ君、リョウ君」

リョウ…君？

誰だ…？誰の事を言っている？

少なくとも大広間に居た者の中でリョウ君とやらに該当する人物は居ない。

「リョウ君、私は悪くないの…私は全部あなたの為に、そうよ…だって私はあなたの物だもの」

「……………」

国崎 瑞穂なる少女のその異様な雰囲気、背筋が冷たくなった。

だが、ここで声をかけない訳にも行かない。

「おい、聞いてんのか？」

俺は国崎 瑞穂なる少女の肩に手を置き、こちらに振り向かせようとした。

すでに後悔しても遅かったが。

数秒もたたない内に…織笠の言った事の意味がようやくわかった。

何故…もっと早く気付いて、慎重に行動しなかったのだろうか。

ここに居る者達は…その全員が自殺してここに居る。

つまり…全員が一度、自分を殺している。

その時点で既に”普通”とは掛け離れた”異常”である。

「…あ
」

気付いた時にはもう遅く。

圧倒的に手遅れで。

国崎がその手に持っていた脇差しくらいの長さの日本刀が。

今まさに俺の腹を突き刺そうと動いていた。

プロローグへ異常（後書き）

【おまけ】

詩織「彼方、何してるの？」

彼方「ん？ああ…、ちよっとメモしてるんだよ」

詩織「メモ？」

彼方「一度にいろんな奴が出てきたからさ、誰が誰だかをさっさと覚えとかないとな」

詩織「そういえば彼方、昔っから人の顔と名前覚えるの苦手だもんね」

彼方「自慢じゃないけどな」

詩織「自慢にしちゃ駄目だけどね」

彼方「よしっと…、これでいいか」

詩織「忘れないように前書きに置いておいた方が良くないんじゃない？」

彼方「前書きに置くって何！？普通そこは肌身離さず持ってろって言うだろ！！」

詩織「次話から彼方メモが前書きに置かれるようになりました」

彼方「勝手に話しを進めるな！何その説明口調」

詩織「彼方メモはシナリオが進む事にこまめに更新予定です」

彼方「毎回消しゴム使って書き直せってか、おい」

詩織「では次回もよろしく」

彼方「…一応、これも書いておくか」

【生存者数・14人】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1653y/>

リ・ライフ～天獄と14人の自殺者達～

2011年11月3日02時00分発行